

コインブラから東アジアへ

—近世東アジアにおける新知識体系をめぐって—

李 梁 (弘前大学人文学部)

一、

16～18世紀の後半期、東アジア諸国で布教の手段として、欧州ルネサンス期の科学諸芸という新知識の伝播に最も力をいれたのは、イエズス会である。1514年、ポルトガル国王の「布教保護権」(Padroado)が教皇レオ十世の勅書によって、東アジアまで拡充されたため、ポルトガル領東インド(Estado da Índia Oriental)へと向かうイエズス会士は、ポルトガル人か否かを問わず、殆ど例外なく、まず一旦リスボンに集まり、ポルトガル国王に忠誠を誓い、そして王室からの許可と援助とを受けて、はじめてリスボンから乗船して各布教地へと旅立ったのである。

当時、ポルトガルに集結したイエズス会士は大抵コインブラ大学をはじめ、ポルトガル国内各地のコレジオで哲学、神学、修辞学および数学などを勉強し、そしてインドのゴア、中国のマカオのコレジオでさらに種々の学問や知識の研鑽に励み、充分一人前の宣教師と認められるようになってから、はじめてインド各地、および東アジア諸国へと派遣されるのである。とくに、ポルトガルが「海の帝国」となるにつれ、ポルトガル以外出身の宣教師にとって、ポルトガル語は、事実上、彼らが修得せねばならない「第一外国語」であった。マテオ・リッチ(利瑪竇、イタリア人)、M・ルッジェリー(羅明堅、イタリア人)、A・シャール(湯若望、ドイツ人)およびF・フェルビースト(南懷仁、ベルギー人)などは、皆コインブラ大学でポルトガル語を勉強していたというのは、その証しである¹。こうしたことからみても、コインブラは、まさに近世初期、東アジアへの新知識伝播の出発点だったと言える。

1 1934年、徳礼賢(P.d'Elia,S.J.)がイエズス会ローマ公文書館(ARSI)で発見されたルッジェリーとリッチによる『葡漢辞典』(DICIONÁRIO PORTUGUÊS-CHINÊS,1583年)の手書き原稿、および日本イエズス会から刊行された長崎版『日葡辞書』(VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM com a declaração em portugues,Nagasaki,1603)などからみても、当時、東アジアの貿易、布教上におけるポルトガル語の重要性の一斑を窺い知ることができる。ちなみに、上述の手書き原稿は、2001年、John W.Witek,S.J.(魏若望)の編集で、ポルトガル国家図書館によって豪華な装幀版の『葡漢辞典』として正式に出版された。なお、ここでいう国籍は便宜的なものである。

二、

1549（天文19）年、フランシスコ・ザビエルが日本人アンジロウに伴われて鹿児島に上陸したことを皮切りに、以降、18世紀後半までの、約二世紀の長きにわたった、広い意味の「キリシタン時代」の幕を切って落とした。その間、主としてイエズス会による布教活動は、東アジア諸国にカトリック信仰とその神学思想を伝え、大いなる思想的衝撃を与えた一方、また布教の手段として伝えたヨーロッパルネサンス期の科学技術諸芸は、当地固有の知識体系—知識構造・価値観・認識論—を動揺させ、やがて一種の真新しい知識体系の発生を誘発したという歴史的事象は、広く知られている。

そういった内外の研究は、重厚な蓄積が既存している。その中で、欧米では、史料および言語利用上の便利さもあって、数世紀来、夥しい研究成果が生み出されている。

日本でも、明治以降、優れた研究者が輩出し、数多くの優れた研究成果が出されている。本研究との関連から言えば、まず村上直次郎の『耶蘇会士日本通信』（駿南社、1927～28年）など先駆的な研究を挙げるべきであろう。そして、海老澤有道の『南蛮学統の研究』（創文社、昭和33年）はイエズス会の教育制度、日本での教育活動を多角に検証し、再検討すべき問題点があるものの、今日でも必備の参考文献である。さらに、高瀬弘一郎の『キリシタン時代の文化と諸相』（八木書房、平成13年）および関連著書では、原典史料に基づいて展開されたキリシタン時代の対外関係、マカオのコレジオに関する緻密な研究は、すぐれて示唆に富んでいる。

なお、関連史料の研究では、松田毅一著『近世初期日本関係南蛮史料の研究』（風間書房、昭和42年）がある。同氏の『日葡交渉史』（教文館、1963年）、榎一雄の「明末のマカオ」（『榎一雄著作集』第5巻、汲古書院、1993年）も関連の先行研究として見落とせない存在である。とくに、大庭脩とロナルド・トビ（R・Toby）との共同研究である“*Seek Knowledge throughout the World: International Information and the Formation of Policy in Edo-Period Japan and K'ang-his Era China*”（未刊行）や山室信一の『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』（岩波書店、2001年）は、近年の刺戟的研究成果として、大変参考に値するものである。

これに比べて、中国の研究状況は、かなり複雑な様相を呈している。1949年以前または大陸以外では、陳垣、張星娘、張蔭麟、方豪などは数々の優れた研究成果を挙げているが、政治的要因により、その後、中国大陸での研究は中断せざるをえなかった。だが、ここ二十数年来、政治的状况が大きく変え、中国大陸でも優秀な研究成果が次々と世に問われるようになった。本研究との関連から言えば、李向玉の『漢学家的揺籃 澳門聖保禄学院研究』（中華書局、2006年）、董少新の

『形神之間—早期西洋医学入華史稿』（上海古籍出版社、2008年）は、ともに東西の一次史料に基づく研究として注目すべき最新成果である。

しかし、こうした研究は、大抵、いわゆる「西力東漸」による東アジア諸国の社会と文化の変容に注目しているだけであって、「西力」自体の知的源泉、とくにイエズス会の教育ネットワークを軸に、ヨーロッパと東アジア地域とをひとつ有機的知の連鎖が如何に構築されたという体系的考察は、管見の限り、まだ殆ど為されていないようである²。事実、イエズス会の教育活動—とくに科学の伝播—の実態に関する系統的研究は、著名なイタリア人科学史家Ugo Baldiniが指摘したように、依然として「ある見落とされた課題」である³。

本研究の狙いは、可能な限り、文献史料と現地調査とをつき合わせながら、イエズス会の教育理念とその実践活動を通じて、そうした歴史的事象を検証することにある。無論、準備の都合で、今日は、全面的な研究所見を報告するというより、大まかな研究構想しかご報告することができず、お詫びとともに、お許し頂きたいと思う。

三、

本報告者は、これまで、漢訳西学書を通して、16世紀末期から18世紀の後半にかけて、西学の東アジア地域における伝播の有り様を検討してみた。そうした試みは、まだ緒に着いたばかりであるが、しかし、そうした研究作業の中、主としてイエズス会が伝えた西学の意義を深く理解しようとするれば、やはり西学そのものの知のルーツ、言い換えれば知識の系譜学の探求は喫緊の課題ではないかと思われるようになった。その場合、ヨーロッパルネサンス期という歴史的背景のもと、イエズス会の教育理念、とりわけ教育実践の活動—各種学校の設立、運営並びに教育内容—をヨーロッパと東アジアという連続的、有機的な視点からのアプローチは避けて通らないであろう。そういう意味で、これからの作業は、大きく

2 いわゆる「西力東漸」による東アジア社会と文化の変容に関する研究は、まさに枚挙に暇がない。ただし、従来のグローバルな東西交流史、比較文化、比較思想の研究に対して、近年、そうした大きな歴史背景のもと、東アジアという特定な地域空間において、一種のローカルな知識体系が新たに構築されたという歴史的事象に注目し、問題提起する試みがなされた。例えば、李天綱の「十六、十七世紀東アジアにおける新知識体系—徐光啓『海防注説』及びイエズス会士ジョアン・ロドリゲスとの関係」（国際研究集会「近世東アジアにおける多様な方向性」、2007年6月29日、弘前大学、本論文の中国語版は黄愛平、黄興涛編『西学与清代文化』、中華所局、2008年所収、265～277頁）は、代表的議論のひとつだと言えよう。だが、それにもかかわらず、知の連鎖という角度からイエズス会の教育理念とその実践活動という制度的な一貫性という側面に着目するような視点を持ち合わせていないというのは、実状である。

3 The Jesuit College in Macao as a meeting point of the Europe, Chinese and Japanese Mathematical Traditions, L.Saraiya etc.ed., *The Jesuits, The Padroado and East Asian Science (1552-1773)*, World Scientific Publishing Co.Pte.Ltd, Singapore, 2008, P.33.

以下の三つに絞って展開していく予定である。

(一) 16世紀における欧州（とくに南欧）の歴史的・社会的背景、イエズス会の教育理念とその実践活動—主としてCollegio Romano (Roma)、Colégio das Artes(Coimbra)、Colégio de santo Antão(Lisboa)、Universidade de Coimbra、Universidade de Évora、Colégio de St Paul de Goa、Colégio de St Paul de Macau—といったコレジオの歴史の実態を総合的に考察し、16世紀以後、東アジアに伝播された新知識の具体的な中身を解明し点検して、その史的意義を再確認しなければならない。

いわば、イエズス会の創始者イグナチオ・デ・ロヨラ（1491～1556）は、彼自身の波瀾に富んだ体験により、会の発足当初から教育重視の姿勢を強く打ち出している。それは、イエズス会の会憲（*Constitutiones Societatis Jesu*）、学事規定（*Ratio studiorum*）など制度的側面だけでなく、学校の設立と運営という実際の教育実践からも充分窺い知ることができる。16～17世紀の交替期において、イエズス会が延べ245の学校を運営しており、第五代目の総長（イエズス会史上最も長く総長の任—33年11ヶ月を勤めたことでも知られる）クラウディオ・アクアヴィヴィア（1581～1615）が亡くなった時、その数はさらに372に上がった⁴。その中でもっとも重要なのは、言うまでもなく、かのローマ学院（Collegio Romano）だったのである。1551年に創立されたローマ学院は、ロヨラの特別な計らいもあって、忽ちイエズス会のもっとも重要な教育機関と成長した。例えば、クラストファー・クラヴィウス（1537～1612、Christopher Clavius、“丁先生”）をはじめ、クリストフ・グリーンベルガー（1561/64～1636、Christoph Grienberger）、クリストフ・シャイナー（1575～1650、Christoph Scheiner）、アナスタシウス・キルシェー（1601～1680、Anastasio Kircher）など当時ヨーロッパでも屈指の教授陣を擁しており、ガリレイ（1564～1642、Galileo Galilei）も一時客員教授を務めたことがあるといった事実からみて、ローマ学院は、文字通り「世界の集約」と称えられたように、当時世界で最高なアカデミー機関のひとつだったのである。後に東アジアの布教活動の中において名高いA・ヴァリニャーノ（范礼安）、リッチ、アレーニ（艾儒略）、アダン・シャル、マルティーニ（1614～1661、衛匡国）およびカルロ・スピノラ（Carlo Spinola, 1564～1622）などは、みなローマ学院の学生だったこともその一端を物語っている⁵。

なお、イエズス会にとって、コインブラ大学もまた重要な教育機関の一つである。そもそも1290年創立されたコインブラ大学は、1540年教皇パウルス三世から公認されたイエズス会とは無縁の存在だったが、16世紀中期から国王ジョアン三世（King João III, 1502～1557）主導の教育改革によって、事実上、コインブラ大学の教授陣の

4 ウィリアム・バンガート著、上智大学中世思想研究所監修『イエズス会の歴史』、原書房、2004年、126頁。

5 同上、129～130頁、Gianni Criveller（柯毅霖）、*Preaching Christ in Late Ming China*, Ricci Institute for Chinese Studies, 1997（王志成ほか訳『晚明基督論』、四川人民出版社、1999年、十二～一四頁）など参照。

多くが一時イエズス会士に牛耳られている。『名理探』のように、後に幾つかの重要な漢訳西学書の底本が、当時コインブラ大学の各種教科書であったという訳はそこにあったのである。そういう意味で、ローマ学院、コインブラ大学を起点として、イエズス会は、ヨーロッパ大陸間における巨大な教育ネットワーク（コレジオ、セミナリオなど）を構築し、東西の知的往還運動を担っていたと言ってもよからう。たとえば、欧州以外に、イエズス会が設立した各種の学校は、ブラジルに17ヶ所、インド（ゴアとマラバー管区）に30ヶ所、東アジア（日本、マカオおよび中国）には10ヶ所に上がった⁶。その中で、ゴアの聖パウロ学院およびマカオの聖パウロ学院は、イエズス会のヨーロッパ以外の地域における最も重要な教育機関だったのである⁷。

本章主要参考文献

1. *Guia de Fontes Portuguesas para a História da Ásia*, Vols.1,2, Instituto dos Arquivos Nacionais Torre do Tombo, Comissão Nacional.
2. *Jesuitas Na Ásia catálogo E gua*, Vols.,1,2, Biblioteca da Ajuda.
3. *Macau e o Oriente*, Na Biblioteca da Ajuda.
4. *Bibliothèque des Écrivains de la Compagnie de Jésus ou Notices Bibliographiques*.
5. *Diccionario Histórico de la Compañia de Jesús*, 1. Institutum Historicum, S.I.2001.
6. C.R.Boxer, *The portuguese Seaborne Empire, 1415-1825*. London, 1969.
7. A.J.R.Russel-Wood, *A World on Move: The Portuguese in Africa, Asia, and America. 1415-1808*. Manchester, 1992.
8. Dauril Alden, *The making of an Enterprise: The Society of Jesus in Portugal, Its Empire, and beyond, 1540-1740*. Stanford, 1996.
9. Ugo Baldini, *The Portuguese Assistaney of the Society of Jesus and Scientific activities in its Asian Mission until 1640*, *História das Ciências Matemáticas: Portugal e o Oriente*. Lisbon, 2000.
10. Mordechai Feingold ed., *The New Science and Jesuit Science: Seventeenth Century Perspectives*. Kluwer Academic Publishers, 2003.
11. *Goa 1510~1685 L'Inde Portugaise, Apostolique et commerciale*, Dirigé par Michel Chaldeigue,

6 Henrique Leitão, “Jesuit Mathematical Practice in Portugal, 1540~1759”, M. Feingold ed., *The New Science and Jesuit Science: Seventeenth Century Persective*, Kluwer Academic Publishers, 2003. pp.230~233を参照。

7 両学院についての最新の包括的な研究は、それぞれ以下の文献を参照すべし。J. Witek ed., *Religion and culture: an international Symposium commemorating the fourth Centenary of the University College of St. Paul, Macao*, 1999, César Guillén Nuñez, *Macao's Church of Saint Paul: A Glimmer of the Baroque in China*, HongKong University Press, 2009. および前掲李向玉著書。

(二) 通辞ジョアン・ロドリゲス (João Rodoriguez, 1561~1634, 陸若漢) の生い立ち、とりわけ日本での学習、成長過程への考察により、イエズス会のコレジオの教育実践の活動を捉え直し、再評価してみる。そして、新史料の発掘を軸に、可能な限り、彼がマカオに追放された後、中国大陸での交友関係や活躍ぶりへの追跡によって、新知識体系の構築における人的要素を検証する。

本章主要参考文献

11. Micheal Cooper, *Rodrigues the Interpreter: An Early Jesuit in Japan and China*, New York, 1974. (松本たま訳『通辞ロドリゲス: 南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』原書房、1991年)
12. M. Cooper, "The Muse Described: Joao Rodorigues' Account of Japanese Poetry", *Monumenta Nipponica* 26 nos. 1/2. 1971.
13. Joseph Moran, "The Well of Japanese Undefined": Joan Rodorigues's Advice on How to Study Japanese", *Monumenta Nipponica* 30, no. 3, Autumn 1975.
14. Jacques Bésineau, *Au Japon avec João Rodrigues 1580~1620*, Centre Culturel calouste gulbenkian Commission Nationale Pour Les Commemorations des Decouvertes Portugaises, Lisbonne-Paris 1998.
15. Sangkeun Kim, *Strange Names of God: The Missionary Translation of the Divine Name and the Chinese Responses to Matteo Ricci's Shangti in Late Ming China, 1583-1644*. Peter Lang Publishing, Inc., New York, 2004.
16. 姜在彦『朝鮮の西学史』、民音社、1990年。
17. 姜在彦『西洋と朝鮮—その異文化との格闘の歴史』、文芸春秋、1994年。
18. 李元淳『朝鮮西学史研究』、一志社、1986 (王玉潔ほか訳、鄒振環校訂『朝鮮西学史研究』、中国社会科学院出版社、2001年。
19. 山口正之『朝鮮キリスト教の文化史的研究』、御茶の水書房、1985年。
20. 『徐光啓集』、『増訂徐文定公集』、『徐光啓著訳集』、『利瑪竇中文著訳集』、『正教奉褒』、『明史』、『明実録』、『清史稿』、『李朝実録』、『日本教会史』(ツーズ・ジョアン・ロドリゲス)、『日本史』(ルイス・フロイス)等、

(三) 科学技術(とくに数学と天文学)の伝播、近世東アジアの知識人の国際認識(新井白石、徐光啓、洪大容)の改変、殊に彼らにみえた伝統的な朱子学的自然観からの転回(認識論におけるパラダイムシフト)への考察によって、16世紀以後、東アジアにおける新知識体系の構築とその実態を解明する。

本章主要参考文献

21. 『カルロ・スピノラー伝』(宮崎賢一郎訳)、『幾何原本』(利瑪竇、徐光啓)、
22. 『李之藻研究』、『方豪六十自定稿』、『中西交通史』(方豪)、
23. 『物理小識』(方以智)、『焚書・續焚書』(李卓吾)、『湛軒書』(洪大容)、
『與猶堂全書』(丁茶山)、『西洋紀聞』、『読史餘論』、『折たく柴の記』(新井白石)
24. 『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』I-III(*The Latin and Japanese MSS of Pedero Gomez's Compedia*)など

四、

かつて、杉本つとむは、「北京学術慕情」というエッセイの締めくくりに、次のように書いている。「しかし、方以智『物理小識』、沈括『夢溪筆談』など、『解体新書』との関連は密である。日中比較検討しても、明代、清代の中国理化学、科学関係書の日本近代化に与えた恩恵は、また山よりも高く海より深しとただ感戴の情しきりである」⁸。そのメタファー的な表現はさておいて、附図1の示すように、明末清初期⁹に世を問うた漢訳西学書は、日本のみならず、広く漢字文化圏の東アジア諸国にも甚大な思想的な影響を与えたのは、歴史の事実である。そして、そうした歴史的事象の背後に、イエズス会をはじめとするカトリック諸修道会の努力、とくにイエズス会による各種コレジオの設立という教育活動があったのも明らかである。いわば、ローマ、コインブラを起点とし、ゴア、マカオ、そして東アジア諸国への知のロードは、四百年前に繰り上げられた知の往還運動の道順であろう。その中で、「文明の十字路」としてのマカオが果たした役割は、極めて大きかった。そうした視点からの研究作業、とくに多分野にわたる研究上のコラボレーションに大いに期待できるものだと思う。

8 東方書店月刊誌『東方』、2006年12月号。

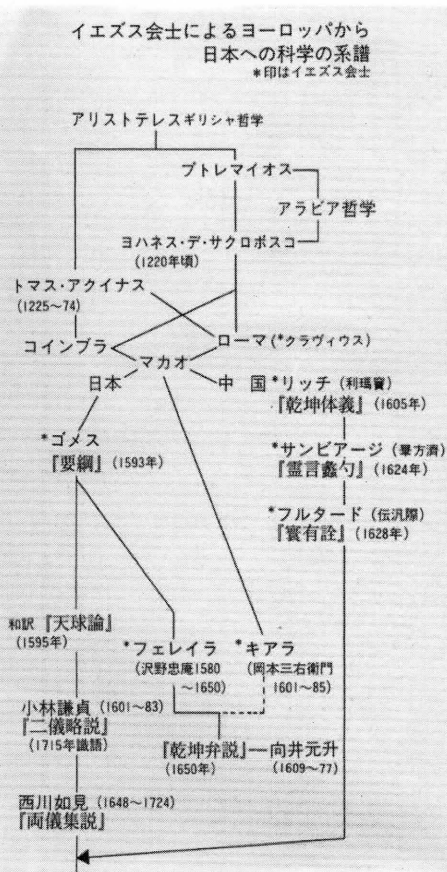
9 明末清初期は、大体明の万暦期(1573~1620)から清の康熙期(1662~1722)前半までの、凡そ一世紀前後の時期とみてよい。『明末清初の社会と文化』(小野和子編、京都大学人文科学研究所、1996年)では、「明末清初というのは、(中略)明の嘉靖末年から清の三藩の乱の平定ごろまで、西暦でいえば、十六世紀後半から十七世紀後半までの、凡そ一世紀を指している」(序文)、とする。本稿との関連上、ここでは、大抵マテオ・リッチが入明した1583年(明萬暦十年)からフランス外国宣教師来清の1687(清康熙二十六年)年、またはフェルビースト(Ferdinand Verbiest、1623~1688、南懷仁)逝去の1688(康熙二十七年)年までを、明末清初期としておく。

附図 1.

出版地は、初版が出た都市である。	
1584	聖教実録 (ルージュエリ 広東) 天主教実録とも呼ばれたカトリックの教理問答
1595	交友論 (リッチ 南昌) 古来、ヨーロッパに流布した友情論を簡易書きで紹介
1595	西国記法 (リッチ 南昌) 漢字・地域・人物などの記憶術を、実例つきで紹介
1602	坤輿万国全図 (リッチ 北京) 5大陸を6幅であらわした世界地図。地学的注記あり
1603	天主実義 (リッチ 北京) 中国人と西洋人の対話形式による天主教の教理問答
1604	二十五篇 (リッチ 北京) ローマ時代の哲人エピクテトスの人生論を紹介
1605	幾何原本 (リッチ) ユークリッド幾何学の前半部を、徐光啓の協力で漢訳
1607	漸進通憲図説 (リッチ・李之藻 北京) アストラーベの原理と構造の解説書
1608	鳴人十篇 (リッチ 北京) 10の宗教的テーマについて、文人と対談した記録
1611	簡平儀版 (ウルシス 北京) 平面アストラーベの技術的なマニュアル
1612	泰西水法 (ウルシス 北京) ヲヨーロッパの水力利用を紹介し、水力学を解説
1614	同文算指 (リッチ 北京) 実用算術の概説。後半には李之藻が問題を付加
1615	圓容乾義 (リッチ 北京) 等周図形をあつかう平面幾何学の命題を解説
1615	天階圖 (ディアス 北京) アリストテレス宇宙モデルによるヨーロッパ天文学概説
1617	測量法義 (リッチ 北京) 象限儀などの観測機器によるヨーロッパ測量術を紹介
1623	職方外紀 (アレニ 杭州) 『坤輿万国全図』の補編。世界5大陸の地理を解説
1623	泰西孔 (アレニ 杭州) イエズス会学事規程を中心にヨーロッパの教育制度を紹介
1623	性学論述 (アレニ 杭州) 靈魂と肉体との関係、天主と理気の区別を論述
1624	靈言靈旨 (カンビアーシ 上海) 人の靈魂についてのアリストテレスの著作を漢訳
1626	西廬真寶 (トリゴー 杭州) 中国語の発音をアルファベットで表記した参考書
1627	進西奇書圖説彙編 (チレンツ・王麗 北京) 西歐の日用品の機械類を図入りで紹介
1628	万物真原 (アレニ 北京) 天主による万物の創造と主宰を論じ、朱子学を批判
1628	寰有錄 (フルタド 杭州) 天球についてのアリストテレスの著作を一部漢訳
1650	天学初函 (李之藻 北京) リッチらによる21作品の漢文著訳書をまとめた叢書
1631	名理探 (フレタド 杭州) アリストテレス論理学を李之藻の協力で漢訳し紹介
1634	星宿曆書 (徐光啓・チレンツ・シャルル 北京) 西法をいれ、宇宙論と曆法を統一
1637	西方答問 (アレニ 泉州) ヲヨーロッパの文化・社会を理想化し、問答形式で紹介
1640	口譯目抄 (アレニ 福建) アレニと福建省文人との自由対話を10年間続けた筆記録
1643	火攻撃要 (シャルル) 西洋法による銃砲・火薬などの製作・使用法を図示し解説
1664	天学伝説 (李祖白) 天主教が中国にはいった歴史と明清での発展を強調した問題書
1669	西方算記 (フェルビースト 北京) 西方答問を抄録し清朝にヨーロッパを紹介
1669	妄推言因之辨 (フェルビースト 広東) 天文を吉凶推算に利用した楊光先を批判
1671	Innocentii Victrici (グヴェア 広東) 楊光先事件におけるイエズス会の勝利報告
1672	坤輿図説 (フェルビースト 北京) 坤輿全図の地理学的解説。5大陸の説明もある
1674	坤輿全図 (フェルビースト 北京) 各地の動物や各目の特徴を記載した世界地図
1675	天階或問 (差空) アリストテレスの宇宙論と自然観を紹介し、日本にも影響あり
1718	皇輿全覽圖 (ジャルトゥ他 北京) 測量による清朝領土と周辺地域の正確な地図
1724	神聖測源 (何国宗・梅登成他 北京) 天文学・数学・音楽理論にかんする西洋科学書
1744	儀象考略 (ケグラー他 北京) 天文儀器のマニュアルと天体観測データ
1761	乾隆十三排地圖 (ブノフ他 北京) 清朝周辺諸国を含めた詳細な銅版アジア地図

*天主教の出版半については諸説がある。

附図 2.



出典：(世界史リブレット 109)
岡本さえ『イエズス会と中国知識人』、
山川出版社、2008年。

出典：尾原悟『「イエズス会日本コレジオ
コンベンティウム
の講義要綱」 I (キリシタン研究第三十四
四輯) 教文館、1997年

基本参考文献

1. 中国第一歴史档案馆ほか編『明清時期澳門問題档案文献匯編』 1 - 6 冊、人民出版社、2005年。
2. 劉芳輯、章文欽校『清代澳門中文档案彙編』上、下冊、葡萄牙東波塔档案館藏、澳門基金会出版、1999年。
3. 張海鵬主編『中葡關係史資料集』上、下、四川人民出版社、1999年。
4. 黃慶華『中葡關係史』 1 - 3 冊、黄山書社、

5. 万 明『中葡早期関係史』、社会科学文献出版社、2001年。
 6. 張天沢著、王順彬ほか訳『中葡通商研究』、華文出版社、2000年。
 5. João Pereira Gomes, *Os Professores de Filosofia da Universidade de Évora.*
 6. *Estudos de História do Relacionamento Luso-Chinês Séculos XVI-XIX*
 7. *Handbook of Christianity in China*
 8. *Diccionario Históico de la Compañiande Jesús*, 4 Vols.
 9. *Guia de Fontes Portuguesas para a História da Ásia*, Vols., I, II
- 『燕行録集』
『湛軒書』
『與猶堂全書』
『熱河日記』
『芝峰類説』